

## 当事者学のすすめ

直井 道子

当事者学という言葉は一般には「少数派」の人々が当事者の視点から問題を語り直し、自分たちのニーズを明らかにしていく場合に用いられてきた。女性は「少数派」とはいえないし、「女性も当事者学を」といってもいぶかしがられるかもしれない。

しかし、女性の人生における選択は以下の三つの意味で変化が大きい。第一に女性の生き方の模範についての語りは時代とともに、「お嫁さん」「お母さん」から「男女共同参画」や「女性の自立」に変化してきた。第二に、女性自身が身近でみつける「なりたい女性」も、小さいときのお母さんや学校の先生から先輩や同僚へ、あるいはニュースで見る政治家や実業家が変わったりする。そして第三に、自分の立ち位置も、結婚、出産、育児、離婚、就労、退職、それに家族の都合などで男性に比して変化が大きい。しかも、これらの三つの変化は随時起こり、その状況は時代背景、家庭の事情などによって千差万別である。その意味では同じ状況の人は少なく、個々の女性は「少数派」だともいえる。

そこで、各自がこの三者の絡み合いの過去をふり返って自分のニーズを確認する必要がある。ただし、出産や育児の影響がなくなってくる年齢以後、状況の差異は少なくなる。実はここからが勝負で、今度は客観的な情報を集めて、個々人が人生を選び取っていくという意味で当事者学という視点が有効である。

私がすすめるまでもなく、多くの女性がそうやって人生の選択をしているのかもしれない。しかし、当事者学という言葉は自分の当事者としての本音に耳を澄ますという意味と、多少とも客観的な情報を入手して整理するという「学」という営みを一語で表現できるメリットがある。その意味で私は女性の多くに当事者学をすすめたいと思う。私ごとを追加するならば、これまで大学院で老年学を教えてきたが、この3月で退職した。これからはひとりの高齢者として当事者学をやりたいと考えている。



### PROFILE

なおいみちこ：東京学芸大学名誉教授。専門は家族社会学、社会老年学。日本学術会議関連の女性研究者で構成する「女性科学研究者をめぐる環境改善に関する懇談会」で研究者の調査を行い、ライフコースの男女比較を原ひろ子編『女性研究者のキャリア形成』（勁草書房、1999）に執筆。著書に『幸福に老いるために』（勁草書房、2001）、共編著に『学校教育の中のジェンダー—子どもと教師の調査から』（日本評論社、2009）など。